

講座①

実践者が語る「新たな支援」のかたち

2025年7月5日(土)
公益財団法人鉄道弘済会
第61回社会福祉セミナー

川村 岳人
(立教大学コミュニティ福祉学部准教授)

本講座の趣旨

●テーマ：実践者が語る「新たな支援」のかたち

- 社会福祉の領域において、「新たな支援」のかたちは常に実践の現場から発信されてきた。
- 今、全国で注目を集める実践者は、自らの支援の軸をどこに置き、どのような「支援者像」を意識しているのだろうか。
- 本講座では、実践者の語りを通じて、「新たな支援」のかたちについて考えたい。

本講座の内容

●パネリスト

- ① **大場 信一氏**（社会福祉法人北翔会理事長兼総合施設長）
- ② **秋山 紅葉氏**（NPO 法人場作りネット理事、「やどかりハウス」コーディネーター）
- ③ **荒井 佑介氏**（NPO 法人サンカクシャ代表理事）

1. 「支援者」として大切にしていることとその理由
2. 現在の支援のスタイルにたどり着いた経緯やきっかけ
3. 今後、どのような「支援」を目指すか

→報告後、論点整理（10分）、討論（30分）、総括（10分）

支援資源につながりにくい人たち

- 申請主義：あらかじめ申請しなければ制度を利用できない。
 - 制度を知らない、現状に課題を感じていない人は、そもそも申請するという選択肢を持ちにくい。
 - 「パワーレス」の状況に陥っている人は、意思の表出や自己決定をする気力も失っている可能性が高い。
 - 申請手続きが煩雑だと感じる人、支援を受けることに迷いやスティグマを感じる人、公的機関に対する不信感がある人は、支援を避ける傾向がある。

▶ こうした人とどのようにつながり、関わりを持つべきか？

「新たな支援」を捉える視点

- 「福祉」を前面に出さない（意識させない）「支援」。
 - 専門職としての見立てに基づいて「課題」の解決を急ぐのではなく、まずは固有性をもった存在としてその人を理解するよう努める。
 - 何気ない日常をともにする関係を築き、本人の中に「このように生きたい」という主体的な意思が芽生えるのを待つ。
 - いまの社会で「生きづらさ」を抱える人びとを支援関係にのみ囲い込むのではなく、社会に開き、社会そのものを変えていく。
- ▶ こうした「支援」をどのように行い、どのような成果を得てきたか？